令和4年度　学校関係者評価書（学力保障　研修部①）

鈴鹿市立明生小学校

NO. 1

評価項目	本年度の活動（具体的な手立て）と指標	学校関係者評価	今後の改善点
授業改革 授業研究 学力向上	①研究授業を年間一人1回行い，指導主事を年間3回招聘する。 ②宿題の量や内容，時間を吟味し，またメディア時間の状況を把握しながら，家庭学習の定着を図る（家庭学習強化週間の実施，毎日家庭学習をする子ども80%）。 ③「本を読むのが好きな子ども」８５％以上。 ④休み時間や放課後を使った補習を行う。 **成果と課題（達成状況を含む）** ①○各学年部で「研究主題」をもとにした授業を研究し，その研究に沿った授業を公開することができた。指導主事の先生方からは，事後検討会において成果や改善点，本校の研究主題に沿った貴重な話をしていただけた。 ②○●「宿題を必ずしていますか」の項目において，９０％の児童が肯定的な回答をしていた。一方で，宿題の取り組みが習慣化していない児童へは，児童だけではなく保護者への働きかけも必要で，担任の負担が大きくなっていると感じる。 ②○「生活習慣チェックシート」を，平田野中学校のテスト期間に合わせて年間５回行った。各学年及び学校全体における成果と課題を把握することができ，子どもたちの学習の実態を保護者に通知することができた。 ③●「本を読むのは好きですか」の項目において，肯定的な回答をした児童が７７．１％にとどまった。各学年及び学習委員会において，意欲的に読書に取り組むための活動を取り入れたり還流したりする必要がある。 ④○休み時間を活動して，学習に困り感を抱えている児童への支援を行えた。今後も，休み時間を中心に，対象となる児童への支援を続けていく。	学年別の児童の様子を経年変化で意識、成長の変化を把握できるデータの提供があるとよい。 先生方の悩みや苦労が理解できた。 読書は子どもたちの学習面での成長に影響があるので、読書推進の取り組みを進めてほしい。	・家庭学習の内容を，各学年の実態に応じて再考し，児童が意欲をもって取り組めるようにする。 ・貸し出し冊数を増やし，児童がより多くの書籍に触れることができるように，図書関係のイベントを増やしたり図書を充実させたりする。

評価項目	本年度の活動（具体的な手立て）と指標	学校関係者評価	今後の改善点
学習ボランティア活用	①学習支援ボランティアの活用。 ②実技的な学習や個別に助言が必要な児童の見守り等で，ボランティアの活用を図る。 **成果と課題（達成状況を含む）** ○今年度，新型コロナウィルスの感染状況を考慮したり，感染防止対策を徹底したりしながらではあるが，学習ボランティアや読み聞かせボランティアの活動が再開された。地域の力とともに子どもたちの指導ができることは，とても有意義なものとなるため，今後も，感染症の状況を踏まえながら，学習ボランティアを活用していきたい。	学習支援によって、子どもの成長にどうかかわれたのかを絶えずボランティア同士、先生と情報交換する必要がある ボランティア支援のシステムをもう少し作っていったほうが良い（共通理解や顔あわせなど）。	・学習ボランティアの積極的な活用を再開し，児童一人ひとりが安心して学習に取り組めるようにする。

評価項目	本年度の活動（具体的な手立て）と指標	学校関係者評価	今後の改善点
キャリア教育	①「すずか夢工房」や「地域人材」等を活用した授業の実施（各学年，年間3回以上）。 ・外部団体と連携した授業の実施。 ・地域の方と連携した授業の実施。 **成果と課題（達成状況を含む）** 今年度は，地域や外部団体の方にお世話になって，以下の活動を行った。 １年生→昔遊び，上靴洗い，靴下洗い，パンジー・チューリップ植え，さつまいも植え，いもほり ２年生→聴診器体験，さつまいも植え、いもほり ３年生→ＳＤＧｓ（食育），昔の道具体験 ４年生→とうもろこし栽培，パッカー車体験，定五郎顕彰会 ５年生→ＳＳピンポン体験，ＬＧＢＴについて考える ６年生→「国府地区まちつくり協議会」との交流，薬の教室，租税教室 来年度も，今年度と同じ回数ほど，地域や外部団体の方にご協力いただく授業を行いたい。	地域人材確保について今後も取り組んでいく必要がある（ボランティア募集、人材確保など）。	・来年度も外部団体や地域の方と連携した授業を積極的に取り入れ、児童がより多くの学習体験を積めるように心がける。

評価項目	本年度の活動（具体的な手立て）と指標	学校関係者評価	今後の改善点
ICT機器の活用	①学年，発達段階に応じた活用を行う。 ②教科指導での活用を行う。 ③教科指導以外での活用，教育活動全般での活用を行う。 ④教師間で，活用について交流，情報交換を行う。 **成果と課題（達成状況を含む）** ①○各学年に設定されている情報教育の目標をもとに，ＩＣＴサポーターの協力を得ながら，各学年でＩＣＴ機器を活用した指導を展開することができた。 ②○スプレッドシートやドキュメントなどのグーグルのソフトや，ミライシードなどを活用できる場面では，子どもたちの実態に沿って，子どもがクロームブックを操作する活動を取り入れた。子どもたちは，様々な操作を通して思考をめぐらせ，本時のめあてを達成しようとしていた。 ③委員会活動の反省をジャムボードで行ったり，休み時間には一部のアプリやインターネット上のタイピングソフトの使用を許可したりして，子どもたちがＩＣＴ機器に触れる機会を増やすことができた。 ④グーグルクラスルームにＩＣＴ教材集をまとめるクラスを作ったり，オクリンクのカードＢＯＸに，授業で使用したカードを保存したりすることで，多様な教材を蓄積させることができた。今後も継続していきたい。 ●教師一人ひとりのＩＣＴに関する知識や技能に差がある。教師間の交流を増やしたり，ＩＣＴ関連の研修の還流会を行ったりして，この差を狭められればと感じる。 ●特に高学年において，教師に気づかれないようにルールを逸脱する行動が目立った。「メディアリテラシー」教育を，年間もしくは学期に１回は行い，情報モラル教育の充実を図りたい。	ICT機器の効果的な活用をさらに研究、研修していく必要がある。 機器を使うことと深い学習につながることを意識した研究が必要である。	・ＩＣＴを活用した授業研究を，さらに充実させる。 ・教職員にＩＣＴ関連の研修を推進する。 ・職員会議等で，ＩＣＴ機器の活用に関して，定期的に情報交換を行う。